

The Report on the villages in East China (13): Jiangsu Province in May and October 2018

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-01-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Benno, Saiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00056587

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



華東農村訪問調査報告(3)

—— 2018年5月・10月、江蘇省の農村 ——

弁 納 才 一

はじめに

筆者は、2008年3月から主に湯可可(江蘇省無錫市政府政治協商委員会研究室元主任)の全面的な協力と支援を得ながら10年余りにわたって上海市や江蘇省の華東農村を訪問し、聞き取り調査を行ってきた¹⁾。そして、2018年には2度にわたって華東農村を訪問し、聞き取り調査を行うことができた。

まず、2018年5月15日～18日、華東師範大学社会発展学院教授の張文明に招聘されて華東師範大学で講演をすることになった内山雅生に同行し、上海市の華東師範大学閔行区校舎と江蘇省太倉市沙溪鎮の農村を訪問した。なお、内山雅生は筆者らも参加した華北農村訪問調査²⁾における2010年度以降の研究代表者だった³⁾。

また、2018年10月19日～21日、金沢大学法学系准教授の古泉達矢とともに華中師範大学中国農村研究院の全面的な協力と支援を得て初めて湖南省農村を訪問して本格的な聞き取り調査を行うことができた。そして、10月22日に武漢から無錫へ高速鉄道で移動し、同日夕刻に無錫市政府政治協商委員会研究室元主任の湯可可や無錫市濱湖区政府委員らと無錫市農村について意見交換を行うとともに24日の無錫市農村訪問に関する打合せを行った。こうして、24日には江蘇省無錫市濱湖区の農村を訪問して農園内を参観するとともに聞き取り調査を無事に行うことができた。

よって、本稿では、2018年5月に訪問した華東師範大学社会発展学院(上海

市郊外の閔行区にある新校舎)及び江蘇省太倉市農村と同年10月に訪問した江蘇省無錫市濱湖区農村すなわち華東農村に関する記録を整理することにした。そして、2016年10月と2017年6月に訪問した湖北省の農村における聞き取り調査の内容については華中農村訪問調査報告(1)としてすでに整理している⁴⁾、2018年10月の湖南省農村訪問聞き取り調査の内容についてはやはり華中農村訪問調査報告(2)として別稿で論じること⁵⁾にしたい。

なお、本稿では、主に煩雑さを避けるために、原則として敬称を略すとともに、算用数字と常用漢字を用いることにした。

I. 2018年5月

(1) 聞き取り調査－江蘇省太倉市農村

聞き取り対象者：施雪濤(写真1を参照)

聞き取り日時：2018年5月17日(休) 12:10～13:10

聞き取り場所：江蘇省太倉市沙溪鎮泰西村施雪濤宅

聞き手：内山雅生・弁納才一・張文明

通訳：張文明

施雪濤の個人史

- ・人民公社時代には直塘鎮にあった綿布を染色するための顔料を生産する化学工場(社隊企業か?)の工場長を務めた。当時、同様の工場を視察するために東北へ行ったこともあるという(同行した張文明が東北の出身だと聞いて)。だが、同工場からの排水が水質汚染の原因となっていたために、同工場はすでに閉鎖された。後に、工場の建物や設備を買い取って貸し出しているの、2018年5月現在でもそのレンタル料が収入の一部となっている。
- ・母の父親が国民党軍に入っていたので、私は1970年代に人民解放軍に入隊することが許されなかった。
- ・2018年5月現在、2畝の農地に冬小麦を栽培している。5月中旬には冬小麦を収穫し、6月上旬には田植えを始める予定である。基本的には二



写真 1. 施雪濤(左側)と筆者(右側)

毛作を行っており、蔬菜も栽培している。また、自宅の裏には数年前に自ら作ったという養魚池がある。以上の蔬菜・穀物・魚などは基本的には全て自家消費用である。

- ・ 2014年に60歳を迎えて本村の書記を定年退職した。本村の書記を務めていた時は、太倉市政府財政部から給料をもらっていたので、太倉市の職員のようなもの(「参公」)だった。定年退職した後は、毎月8,000元の老後年金を支給されている(妻の老後年金は毎月2,000元)。2018年5月現在、妻とともに2人の孫娘の世話をしながら、本村の現幹部達の相談役を務めている。

施雪濤の家族史

- ・ 2015年1月に父の施金生の妻(朱二大)すなわち母が死去し、同年9月1日には父の施金生も亡くなった(享年87歳)。

- ・ 1人息子の施偉峰(1977年生まれ)は、この家から中華保険公司太倉支店に自家用車(キャディラック自動車)で通勤している。また、息子の妻も本村人だが、現在、本村外で働いている。
- ・ 息子の施偉峰には2人の娘がいる。このうち、長女は沙溪中学の高校1年生で、毎日、施雪濤が自家用車(トヨタ自動車)で5:40に家を出発して学校まで送りに行き、帰りは学校へ21:45までには迎えに行っている(長女は学校で夕食を食べ終わってから学校に居残って自習している)。また、次女はまだ4歳(午年生まれ)で、日中は施雪濤がその妻とともに面倒をみている(今回、我々が訪問した時に、この次女は家にいた)。なお、この次女が生まれたのは、近年、一人っ子政策が緩和されて政策が転換したためであるという。

泰西村の変化

- ・ 本村の近くにあった紡績工場(「利泰永豊紗廠」か?)は、欠損を出していたので、2014年に倒産し、閉鎖された。
- ・ 近年、本村に送電用の鉄塔が設置されたために、その用地にあった247戸の家屋が壊されて新築の家屋を建築中である。なお、近年、本村内に冠婚葬祭用の施設が建てられたという。
- ・ 2018年5月現在、本村の総人口は約5,000人で、本村外からの移住者は全くいないという。
- ・ 本村には、陳永貴・許世友・陳慕華(女)・温家宝など、著名な政治家が訪れたことがあるという。また、同じく2018年5月現在、本村の書記は沙溪鎮から派遣されてきた澎源(30歳前後で、沙溪鎮の副鎮長を兼務)で、元々は沙溪鎮の共産党青年団書記だったという。
- ・ 本村にも「村管」が派遣されているが、彼は本村にはほとんどいないし、農業などのことは一切知らないという。このように、我々がこれまで聞き取り調査を行ってきた山西省の農村と同様に、本村でも「村管」制度は完全に形骸化していることを窺い知ることができる。

(2) 訪問地の状況

2018年5月15日～18日、宇都宮大学名誉教授の内山雅生に同行して上海を訪問した。内山雅生は、華東師範大学社会発展学院教授の張文明によって招聘されて16日に講演を行うことになっていた。

14日(月)の夜は、内山雅生とともに成田空港に近いホテルに前泊し、上海滞在中の日程について最終確認を行い、また、2018年度の華北農村訪問調査を主とする共同研究の進め方について打合せを行った。

15日(火)、成田空港を出発してほぼ定刻どおりの昼頃に上海浦東空港に到着すると、税関を通過する前に外国人だけが新たに導入された機械による指紋認証システムで両手10本の指紋登録することを求められた。しかも、税関を通過する際にも指紋認証と従来どおりの顔認証が行われた。その後、X線による荷物検査のために長い行列ができていたが、途中、我々のところから突如として検査が免除され、無事に中国へ入国することができた。当日、屋外はまだ5月だったにもかかわらず、30度を超える真夏日となっていた。よって、同日午後は、ホテルで過ごすことにした。また、夕方になっても涼しくならず、熱帯夜になるような感じだった。

16日(水)、8:00過ぎにホテルのレストランで朝食をとろうとしたが、満席状態だったために、レストランの入口で少し順番待ちをさせられた。前日の天気予報では同日(16日)の最高気温が36度と予想されていた。11:00に華東師範大学社会発展学院教授の張文明がホテルまで自家用車で迎えに来て、閩行区の華中師範大学まで連れて行ってもらったが、同大学閩行区校舎までは約40分を要した。同大学社会発展学院は5階建ての最上階の5階にあるが(写真2を参照)、エレベーターはなかった。ところで、張文明によれば、同大学の閩行区校舎の建築費がかさんだ(奇抜な外見の建物が造られた)ことから、内装費用が不足し、エレベーターを設置する費用を捻出することができなかったのだという。また、同大学当局は数年前からエレベーターを設置する用意があると言っているが、全く見通しが立っていないという。

16日の昼食は華東師範大学側からかなりボリュームのある仕出し弁当が提供されて、5階の控え室でごちそうになった。その際、同大学院生らが飲み物を用意してくれた。こうして、13:30から内山雅生が招待講演(「日本の中国



写真2. 華東師範大学社会発展学院

農村調査和農村共同体研究J)を行った後、簡単な質疑応答が行われた。同大学広報担当の取材陣が写真撮影のために講演会場に来ていた。内山雅生の講演が終了した後、張文明の研究室において3人で意見交換を行った。17:30頃から華中師範大学内のレストランで10人ほどの大学院生たち(上海市出身者は1人もいなかった)とともに食事をしながら歓談した。こうして、20:00過ぎに大学からホテルまで張文明が運転する自家用車で送ってもらったが、そのカー・ナビゲーションが正常に機能しなかったり、途中、高速道路の一部が閉鎖されていたり、公安警察の車輛が駐停車しているために、上海市街地では渋滞している箇所がいくつかあった。そのため、我々が宿泊していたホテルに到着するのに想定以上の時間がかかった。なお、日本に帰国した後で、15日に北朝鮮の要人らが非公開で中国を訪問し、16日か17日には上海を訪問したというニュースを聞いた。

17日(木)、宿泊していたホテルのレストランへ朝食が始まる6:00に行ってみ

ると、すでに20～30歳代を主とする日本人のサラリーマンたちの団体客(10人余り)が朝食をとろうとしていた。

17日は、8:00に内山雅生とともにホテルを出発し、地下鉄1号線陝西南路駅で乗車して上海体育館駅で地下鉄4号線に乗り換え、藍村路駅で下車して2番出口を出て藍村大厦前の藍村路上で9:00に張文明と合流した。そこから張文明が運転する自家用車で太倉市沙溪鎮へ移動したが、途中の外環の高速道路では貿易港に向かう無数のトラックのために非常に酷い渋滞に巻き込まれてしまい、沙溪鎮泰西村に到着した時にはほぼ12:00になっていた。そこで、昼食をとるのを断念して施雪濤宅を訪ねて様子を見に行くことにした。こうして、張文明に自家用車で案内してもらって内山雅生とともに筆者としては約10年ぶりに江蘇省太倉市沙溪鎮泰西村の元書記だった施雪濤(65歳、午年生まれ)宅を事前の連絡無しに突然訪問した⁶⁾。

ただし、近年における中国農村訪問調査の厳しさを体験してきた張文明からのアドバイスを受け入れて本村の村民委員会の建物の前を敢えて素通りすることにした。そして、そのすぐ近くにあった真新しい公衆トイレ(水洗トイレで、非常にきれいだったが、そもそも本村民がこの公衆トイレを使用することはほとんどないと考えられる)を利用し、本村内の道路(全て舗装されていた)を通る本村民と思われる人々に施雪濤宅の場所を教えてもらいながら、どうにか無事に施雪濤宅にたどり着くことができた。ところが、突然の訪問だったために、施雪濤の自宅に我々が到着した時、施雪濤は不在だったが、その妻と孫娘がいた(詳細は後述)。かつて施雪濤が建てた新宅は外装こそ以前のままだったが、室内の壁はすでにボロボロになっていた。施雪濤は妻からの連絡を受けて急いで帰宅すると、かつて筆者が訪問した際に撮影した記念写真を両親がかつて住んでいた旧宅の室内の壁に貼っていると説明した。約10年前に筆者が施雪濤の父親からいただいた土布(手織りの綿布)のことも話題に上った。

今回、我々が訪問した時、施雪濤は本村人に招待されて本村外で昼食をこちそうになっていた。孫娘とともに自宅にいた施雪濤の妻に電話で連絡をとって帰宅してもらった。施雪濤によれば、しばしば本村民(本村の現幹部や本村出身の企業経営者などか?)に昼ご飯をごちそうになっているという。

当日も、昼ご飯をごちそうになっていたという(酒も飲んでいただようである)。今回、我々が話を聞いた旧宅(かつて施雪濤の両親が住んでいた)には、冷房設備と冷蔵庫があり、我々が実雪濤に話を聞いている間に、冷房を入れてくれ、孫娘が冷蔵庫からアイスクャンディーを取り出して食べていた。張文明は、農村訪問に対して常に強い警戒心を抱いていることを頻繁に口にし、早く帰りたいという雰囲気だった。

18日(金)、前日と同様に6:00にホテルのレストランへ朝食を食べに行くと、前日までとは違って食事をしている人はあまりいなかった。前日、朝食を食べていたサラリーマン風の日本人団体客の姿は見えなかった。そして、7:15にホテルをチェック・アウトしてすぐにタクシーで上海浦東空港へ向かったが、まだ7:30前だったにもかかわらず、高速道路は多くの自家用車やタクシーでやや渋滞しており、空港までは約1時間を要し、8:15頃に到着した。

II. 2018年10月

今回、湯可可・薛華・銭江・高来東らに案内してもらって筆者は古泉達矢とともに初めて万豊村を訪問した(写真3を参照)。なお、老人からの聞き取りに関しては、主に湯可可が無錫語から共通語への通訳を担当した。

(1) 聞き取り調査－江蘇省無錫市農村

聞き取り対象者：陳建生

聞き取り日時：2018年10月24日(水) 11:00～12:10

聞き取り場所：無錫市濱湖区馬山街道万豊村踏青農庄

聞き手：弁納才一・古泉達矢

紹介者：陳紅根(陳建生の息子)

案内人：湯可可・薛華・銭江・高来東

陳建生の個人史

- ・旧暦1934年9月(戌年)に生まれ、2018年10月現在で85歳になった。私塾も含めて学校で勉強したことはない。



写真 3. 万豊村踏青農庄

注) 左側から薛華・陳紅根・湯可可・陳建生・古泉達矢・弁納才一・錢江・高來東

- ・解放前，所有地はわずか1畝余りにすぎなかったが，小作地が7～8畝あり，小自作農だった。そして，解放後，3畝余りの土地を分配された上に，さらに，3～4畝の土地を借りていた。
- ・1950年，兄(陳青生)が経営していた上海鴻光印刷所で植字工(「学徒」として6ヶ月間だけ働いたことがあり，その時に仕事をしながら字を覚えた(植字する漢字を辞書で調べた)。兄は，小学校(「水平小学」)を卒業した後，家が貧しかったので，抗日戦争勝利後に上海の印刷所で学徒として働いていたが，経営者との関係が悪くなると，自分で2～3人の職工を擁する印刷所を経営するようになり，さらに，後に福建省に移住し，ずっと都市部で働いていた。
- ・1974～99年，生産隊の隊長を務め，1999年(66歳)に生産隊を退職した。2018年10月現在，10畝余りの農地に蔬菜類を栽培している。

万豊村の地主

- ・解放前、万豊村には3人の地主(王永年、陳耕硯、王耀福)がいた。王永年は、30畝の田畑と数百畝の山地を所有していたが、後継ぎがいなかったもので、その家系は途絶えてしまった。また、陳耕硯は、所有地が20畝余りで多くはなかったが、部屋数は多く、保長をやっていた。そして、弟との2人兄弟だったが、その弟は本村外で勉強して卒業後も本村には戻ってこなかった。さらに、王耀福は、それほど多くの土地を所有していたわけではなく、しかも、家族の中に農作業に従事することができる者がいなかったもので、他人に土地を小作に出していた。

湖匪

- ・解放前、太湖の椒山には「湖匪」(湖上の土匪)が跋扈していた。当該地の保長だった陳耕硯は、その湖匪から村民の生命・財産を保護するために、7人の部下を引き連れて一隻の船を漕いで湖匪を討伐しに行った。すなわち、陳耕硯は一通の手紙を書いて1人の「老太婆」(老婦人)に持って行ってもらって、湖匪に対して生命の安全を保証するからと言って投降するように説得した。だが、結果的には湖匪の頭目が投降して来ると、その頭目は郷長の呉平齋に殺されたので、その他の「湖匪」はみな逃げた。呉平齋は、後に武進区の区長になったが、解放前には台湾に移住した。

(2) 訪問地の状況

10月22日(月)、高速鉄道を利用して武漢駅(G1738, 8:25)から無錫東駅(12:21)へ移動した。無錫市郊外に位置する無錫東駅から無錫駅までは地下鉄2号線を利用して移動し、さらに、地下鉄1号線に乗り換えて無錫駅から宿泊を予定していたホテルの最寄り駅まで移動することができるが、結局、面倒な乗り換えを避けて無錫市の中心市街地にあるホテルまではタクシーで30分余りを要して移動した。

同日午後は、湯可可に無錫市の中心街にある東林書院(写真4を参照)を案内していただいた。筆者は約30年前にまだ全く整備されず、荒れ果てていた東林書院旧趾(小学校の校庭の片隅に小さな建物があるだけで、参観料を徴収

していなかったように記憶している)を参観したことがあったが、古泉達矢にとっては初めての訪問だった。以前と比べて明らかに広い敷地に重厚な建築物が建てられ、東林党の学派的系譜や東林党・非東林党の党争などについても非常に丁寧かつ豊富な説明がなされており、以前に比べてずいぶん立派になっていた。

同日夕刻には、我々が宿泊したホテルの近くに近年完成したばかりの高層ビル内のレストランで湯可可・高来東・銭江・薛華らと会食をしながら、無錫農村社会経済に関する意見交換をするとともに24日に参観する予定となっていた無錫市濱湖区の農村に関する情報を提供していただいた。

10月23日(火)、午前中は無錫のホテルで今回初めて訪問した湖南省農村における聞き取り調査の内容を整理する作業を行い、また、同日午後は筆者と古泉達矢が湯可可に案内していただいて榮巷鎮の榮紀仁宅を訪問して夕食で「無錫排骨」(無錫名物の骨付き肉すなわちスペアリブ)や上海蟹などをごちそ



写真4. 東林書院

うになりながら、栄紀仁の息子夫婦とも歓談した。なお、息子夫婦によると、栄紀仁は上海蟹が旬の時期になると、ほぼ毎晩のように、上海蟹を食べているという。

10月24日(水)、8:50にホテルを出発し、銭江が運転する自家用車で湯可可・薛華・銭江・高来東に案内していただいた無錫市湖濱区馬山街道の農村(万豊村)の農園(踏青農庄)を参観した。同農園は観光地化しており、同農園の入り口には、受付兼簡易事務所があり、その側に「無錫踏青農庄野外運動場価格表」の掲示板が設置されていた。例えば、同農庄への「入場費」が1人20元、卓球台・卓球用具の利用料が1式1時間20元、木炭を含む焼き肉用鉄板利用料が1式50元、1卓10人の「農家飯」(田舎料理)が600元からなどとなっている(写真5を参照)。

同農園は太湖に面しているところ以外は小さな山に囲まれた盆地になっており、江南の農村の一農家としては広大な農地が広がっていた。様々な物資

[illegible]

写真5. 無錫踏青農庄野外運動場価格表

の上げ下げのために利用していると思われる滑車が設置されていた(写真 6 を参照)。また、同農園内では数匹の犬が放し飼いされていた。

なお、同農園内には水洗トイレが数棟あった以外に、畳敷きの野外宿泊施設がいくつか設置してあった(写真 7 を参照)。室内には布団や折りたたみ式のテーブルなどが備えられていた。

さらに、同農園の敷地内には自宅とは別に 2 階建ての建物があり、陳紅根(陳建生の息子)が自分自身で建てたという。1 階には小会議室と冷蔵庫を備えた給湯室があり、2 階には昔の農具などの展示室があった。そして、この展示室内には、明代にこの地にやって来た始祖夫妻の立像(まるで皇帝のような衣装を纏っていた)を描いた絵が壁に掛けられていたので、家譜があるのかもしれない。

この踏青農庄を経営している陳紅根に本来は土産物用として販売している草履を一足いただいたが、この地域で生まれた高来東によれば、幼少期には



写真 6. 踏青農庄全景



写真7. 踏青農庄内の移動式簡易宿泊施設

皆このような草履を履いていたという。

陳建生に話を聞いた後、陳紅根に同農園内の野外レストランで昼食として「農家飯」をごちそうになった。料理の素材の蔬菜(葱・青菜・大根・「茭白」(真菰)など)は同農園内で陳建生が栽培したものであろう。

さらに、同日午後は、踏青農庄を離れた後、引き続き湯可・薛華・錢江・高来東に案内していただいて太湖沿岸の景勝地ともなっている龍頭渚にある龍王廟(写真8・写真9を参照)などを参観し、当該地域の歴史についてもいろいろと説明を受けた。その時、我々以外に龍王廟を訪問する者は1人もいなかった。

10月25日(木)、15:00～17:00、華東師範大学社会発展学院で「現代中国農村経済的三元結構」(近現代中国農村経済の三層的構造)と題して近現代中国農村経済発展の特質(都市と農村の二重経済構造論的な理解を超克するために、近現代中国農村地域が县城(町)・县城近郊農村・周辺農村という三層的の社会経



写真 8. 龍王廟

済構造を形成しながら経済発展してきたことを力説した)について講演を行った。当日、その会場には張文明が研究教育指導している修士課程・博士課程の大学院生20人ほどが参加しており、筆者が問題提起した近現代中国農村経済の三層的社會經濟構造が中国全域に適應可能なのかなど、いくつかの簡単な質疑応答が行われた。



写真 9. 龍王廟

おわりに

2018年5月中旬に上海市から太倉市を訪問して沙溪鎮泰西村で書記を務めていた施雪濤に約10年ぶりに会って話を聞くことができたことは非常に意義深かった。ただし、意外にも、泰西村で生じていた変化は相対的に小さいと感じた。すなわち、工場用地として転売されて農地が減少しているようには見えなかったし、農業生産も維持されていた。また、農村の青壮年層は農業には従事しないが、鎮(町)に移住するわけでもなく、農村から鎮の職場へ通勤している。ただし、最近10年間、外来人口の増加も全くなかったというから、都市近郊農村としてベッドタウン化が進行しているわけでもなかった。泰西村では一般的に米と小麦の二毛作が行われているが、これらの穀物生産が主要には販売目的なのか自家消費用なのかについては、今後、聞き取り調査を行いたい。

一方、2018年10月に訪問した無錫市濱湖区万豊村の踏青農庄は、従来の中国農村とはかなり風貌を異にしており、若干、衝撃を受けた。今回は初めての訪問だったので、是非、再度訪問してとりわけ陳建生が人民公社の生産隊長を務めた頃の状況についてじっくりと話を聞いてみたい。

注

- 1) 華東農村調査については、拙稿「華東農村訪問調査報告(1)－2008年3月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号、2008年12月)・同「華東農村訪問調査報告(2)－2008年9月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第2号、2009年3月)・同「華東農村訪問調査報告(3)－2009年3月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号、2009年12月)・同「華東農村訪問調査報告(4)－2010年2月・3月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第31巻第1号、2010年12月)・同「華東農村訪問調査報告(5)－2010年12月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号、2011年12月)・同「華東農村訪問調査報告(6)－2011年11月、江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号、2012年3月)・同「華東農村訪問調査報告(7)－2012年3月、江蘇省の農村－」(『北陸史学』第60号、2013年2月)・同「華東農村訪問調査報告(8)－2013年9月、江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第34巻第2号、2014年3月)・同「華東農村訪問調査報告(9)－2014年3月、

- 江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第35巻第1号, 2015年1月)・同「華東農村訪問調査報告⑩－2014年12月, 江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第36巻第1号, 2015年12月)・同「華東農村訪問調査報告⑪－2015年5月, 江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第36巻第1号, 2015年12月)・同「消え行く華東地域の農村－江蘇省無錫県の2ヶ村を例として－」(東洋文庫近代中国研究班『近代中国研究彙報』第39号, 2017年3月)・同「華東農村訪問調査報告⑫－2017年5月, 2018年3月・5月, 台湾・上海市・江蘇省－」(『金沢大学経済論集』第39巻第1号, 2018年12月)を参照されたい。
- 2) 華北農村調査については, 拙稿「華北農村訪問調査報告(1)－2007年12月, 山西省太原市・霍州市の農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号, 2008年12月)・同「華北農村訪問調査報告(2)－2008年12月, 山西省太原市・平遥市・霍州市の農村－」(『北陸史学』第57号, 2010年7月)・同「華北農村訪問調査報告(3)－2009年12月, 山西省P県の農村－」(『日本海域研究』第42号, 2011年3月)・同「華北農村訪問調査報告(4)－2010年8月, 山西省P県の農村－」(『金沢大学経済論集』第31巻第2号, 2011年3月)・同「華北農村訪問調査報告(5)－2010年12月, 山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号, 2011年12月)・同「華北農村訪問調査報告(6)－2011年8月, 山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号, 2012年3月)・同「華北農村訪問調査報告(7)－2012年8月, 山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第33巻第1号, 2012年12月)・同「華北農村訪問調査報告(8)－2013年8月, 山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第34巻第1号, 2013年12月)・同「華北農村訪問調査報告(9)－2014年8月, 山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第35巻第1号, 2015年1月)・同「華北農村訪問調査報告⑩－2014年9月, 河北省・山東省の農村－」(『金沢大学経済論集』第35巻第2号, 2015年3月)・同「華北農村訪問調査報告⑪－2015年9月, 河北省・山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第36巻第2号, 2016年3月)・同「華北農村訪問調査報告⑫－2016年9月, 雲南省・河北省・山西省－」(『日本海域研究』第49号, 2018年3月)を参照されたい。
- 3) 科学研究費助成事業・基盤研究(A)(海外学術調査), 2010～2014年度「近現代中国農村における環境ガバナンスと伝統社会に関する史的研究」(研究代表者: 内山雅生)の研究分担者となった。そもそも, 内山雅生とともに科学研究費助成事業・基盤研究(B)(一般)2005～2007年度「中国内陸地域における農村変革の歴史的研究」(研究代表者: 三谷孝)の研究分担者となり, 2005年から華北農村訪問調査に参加した。
- 4) 拙稿「華中農村訪問調査報告(1)－2016年10月・2017年6月, 湖北省の農村－」(霞山会『中国研究論叢』第18号, 2018年12月)。
- 5) 拙稿「華中農村訪問調査報告(2)－2018年10月, 湖南省の農村－」(霞山会『中国研究論叢』第19号, 2019年11月)を参照されたい。
- 6) 江蘇省太倉市沙溪鎮泰西村については, 前掲拙稿「華東農村訪問調査報告(1)－2008年3月, 江蘇省・上海市の農村－」289～292頁・同「華東農村訪問調査報告(2)－2008年9月, 江蘇省・上海市の農村－」418～423頁・同「華東農村訪問調査報告(3)－2009年3月, 江蘇省・上海市の農村－」336～340頁・同「華東農村訪問調査報告(4)－2010年

2月・3月, 江蘇省・上海市の農村―」191～194頁を参照されたい。

補記) 科学研究費助成事業(基盤研究(B)(一般)2018年度～2022年度「社会主語経済体制下の中国農村における社会環境の特質と変容に関する再検討」研究代表者: 弁納才一, 課題番号18H00876)による研究成果の一部である。